

コロナ下の交友関係の変化とその要因

～交友満足のための有効な施策とは～

班員：小林泰輝(班長) 斎藤一真(副班長) 室岡浩基(接続)
深井翼(DB) 山内賢人(PPT) 北山晴喜(記録)
担当教員：和田健太郎 TA:高橋諒

1 背景・目的

コロナウイルスの感染拡大防止のために始まったオンライン講義だが、筑波大学新聞によると教員側でも生徒側でも肯定的な意見が多数を占めており、オンライン講義の導入による利便性の向上は確かなものと言える。しかしオンラインでの大学生活は一般に思い描く大学生活とはかけ離れたもので、「大学に行けない」「友達ができない」などの理由で大学生活に納得できていない生徒がいることも事実である。そんな状況を鑑みて文部科学省は対面授業を全体の半数以上にするように各大学へ要請、そして対面授業が半数未満の大学名を公表すると発表した。しかし文部科学省の発表に対するネットの声は様々で、「受験生の進学先選びには大事な情報だ」といった肯定的な意見や、「公表したところで何も変わらない」「大学側も好きで対面授業を減らしているのではない」など否定的な意見も目立つ。そのような状況の中で必要なことは問題の本質を見抜き、現状打開のために本当に有効な解決策を見出すこと。そのために私たち 7 班は交友関係の満足度を上昇させるための提案を、筑波大生を対象としたアンケートの回答を分析し、その分析結果に基づいた形で行うこととした。

2 アンケートの概要

全 48 項目の質問で構成されたアンケートの調査は筑波大生・院生を対象とし、11/4～11/17 の期間内に 294 件の有効な回答を得た。性別は男性 173 人、女性 116 人、その他 5 人で、理工学群(105 名)を中心に、生命環境学群(46 名)、人文・文化学群(33 名)など全ての学群、及び大学院生(10 名)から回答を集計した。また、18 年度以前入学者は 60 人、19 年度入学者は 93 人、20 年度入学者は 141 人である。本アンケートでは、昨年春学期・今年春学期・今年秋学期のそれぞれにおいて、交友の満足度・交友人数(1 週間当たりの平均交友人数)、人数に影響する要因などを計測した。

3 アンケートの分析

(ア) 人数と満足度について

まず、大学に入学した時点の交友について分析するために、1 年生の今年春と 2 年生の昨年春の交友人数の平均と満足度の平均を比較したところ、以下の通りになった。なお、満足度は最高点を 6 点、最低点を 1 点とした。

表 1 1 年生と 2 年生の比較

	1 年生今春	2 年生昨春	1 年生今秋
長い会話	1.6 人	13.5 人	7.6 人
軽い会話	1.6 人	19.0 人	7.8 人
挨拶・会釈	1.1 人	19.4 人	8.5 人
通話	6.4 人	1.3 人	3.8 人
チャット	4.2 人	7.5 人	5.5 人
満足度	2.8 点	4.6 点	4.1 点

この表から今年の新入生は 2 年生の昨年春と比較して交友人数が明らかに少ないことが分かる。また、満足度も 2 点近く差がついている。このデータの比較から今年の新入生は例年と比較して交友の人数が少なく満足度が低いということが示された。なお、2 年生の昨年春と 1 年生の今年秋を比べると、交友人数に差はみられるものの満足度には大きな差はみられない。対面講義が少しでもあると満足度は大きくあがると推測される。

次に、2 年生以上の交友の変化について分析する。

表 2 2 年生以上の交友の変化

	2 年生以上昨春	2 年生以上今春
長い会話	12.8 人	2.1 人
軽い会話	17.8 人	2.5 人
挨拶・会釈	18.6 人	3.1 人
通話	1.3 人	6.9 人
チャット	7.7 人	6.7 人
満足度	4.8 点	3.3 点

この表から 2 年生以上における昨春と今春の交友関係は大きく変化していることが分かる。通話の人数は増加したもの

の、対面での交友（長時間の会話、軽い会話、挨拶・会釈）は大幅に減少している。満足度に関してだが、まず昨春の満足度が非常に高い。そして今春は1.5点マイナスの3.3点だが、これは四捨五入すれば「満足している」から「どちらかといえば満足していない」に下がったことを意味する。つまり2年生以上も交友の満足度は減少したといえる。ただ今春における1年生と2年生以上の満足度では2年生以上のほうが0.5点高いという結果が出た。これは2年生以上が1年生と違ってすでに友達ができているという違いから生まれたのではないかと推測される。

さらに、19年度以前入学者の場面ごとの交友人数について分析する。以下の表は、19年度以前入学者の挨拶・会釈、短時間の会話、長時間の会話それぞれについて昨年春を100としたときのそれぞれの期間の平均人数を表したものである。

表 3 場面ごとの交友人数の変化

	挨拶・会釈	短時間	長時間
昨年春	100	100	100
今年春	16.7	14.0	16.4
今年秋	43.0	37.6	50.8

この結果によると、今年春について軽い交友、長い時間の交友どちらについても同様に減っていることがわかった。しかし、今年の秋については長時間の交友の方が減少は小さいということがわかった。今年春は自粛風潮が強く、一緒に食事などに出かけたくても出かけなかった、あるいは対面講義というきっかけがないとわざわざ会いにいかないという2つの理由が考えられる。

最後に、2019年度以前入学者の去年春、今年春、今年秋の通話・ビデオ会議の人数、チャットをした人数について比較する。通話・ビデオ会議の平均人数は、昨年春は1.3人、今年春は6.9人、今年秋は4.9人であった。一方、チャットの平均人数は、昨年春が7.7人、今年春が6.7人、今年秋が6.5人であった。通話・ビデオ会議については交友人数が増加したが、チャットについては交友人数が変化しなかった。テキストコミュニケーションは主に親睦を深めることよりも、業務連絡に使われており、行う連絡の量はコロナ下でも変化しなかったためチャットの人数についての差は見られなかったと考えられる。

(イ) 満足度と交友人数間の関係について

交友の全5種類において以下のようなグラフを作成した。グラフからもわかるように、入学年度・学期にかかわらず、

長時間の会話をする人数が多いほど、満足度が高い傾向にあることがわかり、通話・ビデオ通話は満足度の高さにほとんど影響していないことがわかった。

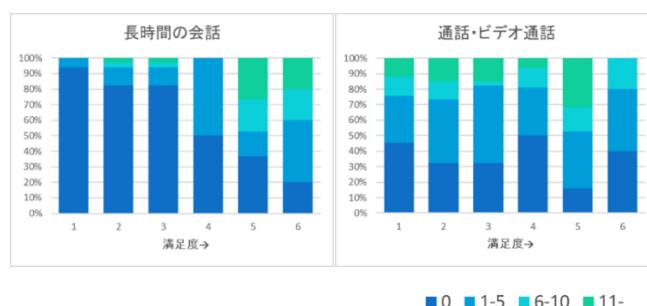


図 1 今年春の1年生の交友人数と満足度の関係

(ウ) 性格による交友関係の違いについて

【調査手法】

まず、アンケート内で実施したショートビッグファイブテストの結果から主成分分析を実施し、以下のような2群に分類した。外向性が低く、協調性が高いことなどから第1群をのび太群、外向性が高く、神経症傾向が低いことなどから第2群をジャイアン群と名付け、各々の因子得点がどちら群に近いかによって分類した。

表 4 主成分分析結果

	のび太群	ジャイアン群
外向性	-.430	.594
協調性	.571	.267
誠実性	.444	.702
神経症傾向	.438	-.509
開放性	-.743	-.019

昨年春学期(2019年度以前入学者のみ)・今年春学期・今年秋学期の交友の人数・満足度において、両群に差は見られるのか、また、年度によってその差は異なるのかなどについて調査した。

【2020年度入学者(のび太群 65人・ジャイアン群 76人)】

今年春学期においては、ジャイアン群の方が満足度は高く、交友人数に関しても、全5項目でジャイアン群の方が多い傾向にあった。このことから、対面・オンラインに関わらず、ジャイアン群には何らかの方法でコンタクトをとっている人が多く、それが高い満足度に繋がっていることがわかった。

今年秋学期においては、両群ともに満足している人の割合が大幅に増加したが、やはりジャイアン群の方が満足度は高い傾向にあった。交友の人数に関しては、両群の差が大きく縮まった。全体的に0人の割合の差が縮まったほか、10人

以上の割合にもほとんど差がみられなかった。このことから、対面授業が解禁されると交友人数に差がなくなることがわかった。

【2019年度以前入学者(のび太群 76人、ジャイアン群 77人)】

昨年春学期においては、ジャイアン群のほうが交友人数は多い傾向にある。これは、コロナ禍発生以前であるため、純粋に性格による積極性の差が表れていると考えられる。

今年春・秋学期においては、ジャイアン群のほうが満足度は若干高い傾向にあるが、性格による交友人数に大きな差は見られなかった。20年度入学者と同様にジャイアン群のほうが満足度は高い傾向が表れている。人数についてはコロナ禍において新たな交友関係を築くことはしておらず、性格による差が出なかったと考えられる。

【2020年度入学者と2019年度以前入学者の比較】

20年度入学者は今年春から秋にかけて性格による交友人数の差が縮まっているのに対し、19年度以前入学者は今年度春の対面以外で性格による差は特に見られなかった。これは19年度以前入学者が以前からあった関係を持続させているのに対し、20年度入学者は新たに関係を築かなければならなかったため積極性の差が表れたと考えられる。

共通点としては学年に関わらず全体的にジャイアン群のほうが交友人数は多く(0人の割合が少ない)、今年度春に違いが大きく表れていることが挙げられる。

以下は満足度の比較である。

表 5 20年度入学者の性格による満足度比較

2020年度	のび太群	ジャイアン群
今年春学期	2.71	2.84
今年秋学期	3.91	4.29

表 6 19年度以前入学者の性格による満足度比較

2019年度以前	のび太群	ジャイアン群
昨年春学期	4.66	4.88
今年春学期	3.13	3.44
今年秋学期	4.04	4.16

※満足度：1(低い)→6(高い)

(エ) 交友人数と規定要因の分析

交友人数を被説明変数、要因を説明変数とする重回帰分析を実施し分析を行った。

【昨年春】

結果についてはスライド 23 ページ目を参照。ここで注目

すべきは、Instagram ストーリー投稿数が増えると長時間以外の交友が有意に増加することである。

【今年春】

結果についてはスライド 24 ページ目を参照。ここで注目すべきは Instagram ストーリー投稿数が増えると全ての交友が有意に増加すること、居住環境が実家になると全ての交友が有意に減少すること、学内団体でのオンライン活動が増えると長時間・短時間のリアルでの交友が有意に増加することである。

【今年秋】

結果についてはスライド 25 ページ参照。ここで注目すべきは Instagram ストーリー投稿数が増加すると全ての交友が有意に増加すること、対面授業の週当たりのコマ数が増加すると短時間・挨拶会釈の交友人数のみが有意に増加すること、今年春に影響があった居住環境要因の影響が見られなくなっていることである。

4 提案

(ア) 今後の授業形態について

まず前提として授業は勉強をするためだけでなく交友関係を築く場所でもある。前述したとおり、文科省はより対面授業を増やすような方針を設定している。この理由として、文科省は直接の対面による学生同士や学生と教職員間の人的な交流も重要な要素であると述べている。しかしながら、5割以上という基準は本当に適切なのだろうか。

筑波大学でも秋学期になって対面授業が再開した。アンケートによると回答した筑波大学生のうち約6分の5が対面授業は1コマ以上あると回答した。ここで、対面授業が0コマ群と1コマ以上の群に分けて交友人数の差についてのT検定を行った。結果、長時間の会話、軽い会話、挨拶会釈が有意な差が見られた。長時間の会話が最も満足度に影響を与えているので、0コマと1コマ以上では大きな差があるとわかる。

また対面授業が全くなかった今年春と一部行われた今年秋で比べると、のび太群とジャイアン群、宅通群とその他群では交友人数の差がなくなった。また、今年秋の1年生の満足度はかなり上がっており、対面授業再開の影響が出ていると考えられる。また先ほども示した通りオンライン授業は教員生徒ともに評価が高い。

オンライン授業の良さ、対面授業が全くない春学期と一部ある秋学期の違い、0コマ群と1コマ群の差が大きいという分析結果から、5割以上の対面授業は必要ないのではないかとこのことが言える。

(イ) 学内 SNS の提案

私たちは、筑波大生間、特に新入生の「対面での交友」のきっかけづくりとして筑波大学独自の学内 SNS があつたら良いのではないかと考えた。学内 SNS を提案することになったのは、長時間の会話が満足度を上げているということがアンケートの分析結果からわかったからである。そこで、対面での交友を促進するオンラインツールが必要なのではないかと考えたのだ。既存の SNS を活用すればよいのではないかと思う人もいるだろう。しかし、既存の SNS では対面での交友のきっかけを作ることは難しいと考えられる。例えば、LINE は入学時に学類の学年グループは作成されるかもしれないが、そこから対面での交友につなげるのは困難だ。また、Instagram や Twitter は前提としてフォロー・フォロワーの関係になる必要があるが、それが大変な作業である。フォローできたとしてもそのあと対面での交友にはつながらない。そこで、ユーザーを筑波大生に限定して閉じた空間を生み出すということを考えた。利用者は筑波大生に限定されるので学生は安心して利用できるし、プロフィールも詳しく設定しやすくなる。オンライン上でのそういった環境が対面での交友につながると期待することができる。

登録方法は大学の統一認証システム（ユーザ ID とパスワード）を利用する。プロフィールは、名前（ニックネーム）・学類・所属しているもしくは自分が気になっているサークル等の団体・趣味のタグ・自己紹介文などを書き込めるようにする。また、学生個人のアカウントだけではなく、サークル・部活等の団体もアカウントを作れるようにする。

これより機能の説明を行う。学内 SNS を提案するにあたって、2 つの取り入れたい機能について説明する。

1 つ目はタイムライン機能だ。これは、人を集めて何かをしたいときに呼びかけすることができる機能である。例えば、テスト勉強に誘ったり、先輩に過去問を持っていないか聞いたり、食事に誘ったりすることができる。お誘いをするときには連名でタイムラインに投稿でき、募集人数の設定も行える。また、タイムラインを見る側の人は投稿をスワイプ式で閲覧していくシステムにする。右スワイプをすれば参加したいという意思表示、左スワイプをすれば不参加という意思表示になる。右スワイプをした場合はタイムラインの投稿者に通知が届き、それを投稿者が確認してその人とイベントを行うか否かを決定するというマッチング方式をとる。スワイプ式にした背景としては、受動的な人でも利用しやすい点と、タイムラインの投稿がランダムに表示されるので偶発的な出

会を生み出せるという点にある。既存の SNS では能動的に動かないと対面での交友が生まれにくかったが、このスワイプ機能があれば受動的な人でも簡単に意思表示ができる。また、これまで一切かかわりを持っていなかった人とマッチする可能性も高く、偶然の出会いというものが生まれやすい。

2 つ目は、検索機能だ。これは、自分と気の合いそうな人を探せる機能だ。プロフィールで趣味のタグや気になっている・興味を持っている団体を設定しておくことで自分と共通の趣味をもつ人、同じ団体に興味がある人を見つけることができる。また、気になっている・興味を持っている団体をプロフィールで設定しておくことで、団体側がそれを頼りに自分たちの団体に興味を持ってくれている学生を見つけて、その人にアプローチすることができる。団体への勧誘のターゲットは主に 1 年生となるだろうが、2 年生以上の学生でも、これから新たな団体に入ろうと思っている人たちも対象となる。趣味のタグなどで共通点を見つけて効率よく気の合いそうな人と交友のきっかけを作ることや、サークル等に入りやすい環境を作れることを可能にする。

また、以上 2 つの機能を使って見つけた気の合いそうな人と連絡が取れるようにチャット機能も取り入れるのが良いと考えている。

これらの、既存の SNS にはない学内 SNS の機能を活用して、筑波大生間での対面での交友でのきっかけを作ってもらい、大学生活の満足度を上げてもらうというのが最大のねらいである。

5 今後の展望

この演習で提案した学内 SNS をアプリとして開発するため、収益性、運営体制の検討を重ねる。

6 謝辞

本演習においてアンケートにご協力いただいた学生の皆様、そしてご指導くださった担当教員の和田健太郎先生、TA の高橋諒さんにこの場を借りて感謝を申し上げます。